

P-018

園児の食物誤嚥事故を想定したチームでの緊急対応訓練～シミュレーション・ベースド・トレーニングの実践報告～

嶋田 純

帯広大谷短期大学 看護学科

【はじめに】

内閣府の「教育・保育施設等における事故報告集計」によると、事故報告は2018年1641件から2022年2461件と増加している。「教育・保育施設等における事故防止及び事故発生時の対応のためのガイドライン」(2018:内閣府, 文部科学省, 厚生労働省)に基づき、迅速な緊急対応が可能となる訓練を行わなければならないとしているが、緊急時の対応の訓練は各施設に委ねられており、実施状況や訓練方法は様々である。

【目的】

実施されている訓練は講義、演習形式が主であり、先行文献では、シミュレーション・ベースド・トレーニング(以下 SBT)を用いた対応訓練に関する報告はない。今回「園児の食物誤嚥場面」を想定したSBTを行ったので、その実践効果と今後の課題を明らかにする。

【方法】

A町子育て支援課が主催する研修会「幼稚園や保育所内で発症した緊急時の対応について」をSBTで行った。対象者は、7施設82名の保育士であった。シミュレーション実施者と他施設を3つのグループに分け、それぞれのグループにファシリテーターを配置した。緊張をほぐしコミュニケーションを促すためにグループ対抗のアイスブレイクを実施した後、シミュレーション、デブリーフィングを2回実施した。研修参加者には、研修会後の記述式アンケートを研究に用いることを説明して提出をもって同意とした。なお、本研究は所属機関の倫理審査委員会の承認を受けている。

【結果】

アンケートには、「デブリーフィングでは、一人だけでは分からないことが、話し合うことでいろいろな視点で意見が出て良かった。」「SBTは初めて受けたが、分かりやすく記憶に残るものであった。」「SBTはやればやるほど、もっと良くなると思うので、またやりたい。」「観察者としてみると、いろいろなことに気づける。」「他の園の意見を聞くことで違った視点に気がついた。」「AEDの使い方、心臓マッサージ、背部叩打法など正しくできなかった。」などの記載があった。

【考察】

参加者の感想から、①学習者が自ら主体的に経験を繰り返すことができた、②模擬的な環境で実際のような経験をし、デブリーフィングで学習者自らの気づきを共有することにより技術の修得効果が高かった。課題として、AEDの使用方法など一つひとつのタスクトレーニングの達成度の確認が必要であったと考える。

P-019

幼稚園におけるダウン症のある幼児のインクルーシブ保育・教育実践
～発達支援・適応支援・ありのまま支援の視点から～小柳 菜穂¹、橋本 創一²¹東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科²東京学芸大学

【問題と目的】

本研究では、幼稚園に通うダウン症のある幼児Xと、Xに関わった支援者の記録をもとに、X、周囲児、担任・副担任、支援者の立場と、発達支援(以下、D+S)・適応支援(以下、A+S)・ありのまま支援(対象児の好きなことや得意なことを活かして過ごせるように関わる支援)の3つの視点から、インクルーシブ教育・保育の実践から理論や支援の体系化に向けて検討した。

【方法】

調査対象者はダウン症のある幼児Xである。筆者はXが通う幼稚園に週一度の頻度で支援者として関わり、その際に観察した様子を記録した。調査期間は、Xが4歳児～5歳児にかけての2年間で、身辺自立、自由あそび場面、集団活動場面を記録した。なお、本調査は東京学芸大学研究倫理委員会の承認を受けて実施した(受付番号:542)。

【結果と考察】

2年間でXの発達の変化によって大きく4期に区分し検討を行った結果、Xの発達の様相に伴ってD+S、A+S、ありのまま支援の比重が変化していたことが明らかになった。

<コミュニケーション芽生え期>

この時期以前のAは「ノン!」「イヤ!」で拒否を示したり、担任や支援者のことを「マ!」と呼びかけたりしていた。そのため、この時期支援者はAの好きな遊びを共に楽しむことを通して、Aの気持ちの代弁や言語化、ゆっくり・はっきりと語彙を使ってやり取りすることを意識した。この時期はDSとありのまま支援が重点的になされた。

<ADL向上期>

担任・副担任、支援者の誘導と声掛けを通して、登園後の支度が少しずつ定着してきた時期であった。また、保護者や担任らがプールの開始とともにトイレに力を入れ始めた時期でもあり、この時期にはASが重点的になされ、トイレも少しずつ成功体験を積んだ。

<コミュニケーション深まり期>

語彙の発達により、他児とも単語レベルでやりとりできる場面が見られ始めた。そのため、周囲児への関心の広がりが見られた。そこで、やりとりのための言語(かして、ありがとう、ごめんね等)を支援者と共に他児に伝えることを意識し、DS的関わりが中心だった。

<自立心の芽生え期>

A自身でできることが増え、それに伴い支援者も就学に向けてASを意識することが増えた。しかし、その結果Aの自立心の芽生えと共に支援者への拒否が増えた。